

震災ボランティアから福祉の道への夢

藤丸 綾

AYA FUJIMARU

兵庫県立農業高等学校

●兵庫県

私は将来臨床心理士となり、福祉の道に身を委ね、人との出会いの中で生きてゆきたい。

この夢は、真摯に生きる人達との出会いが、私に授けてくれたものだ。

（１）震災ボランティア体験を通して

私が中学二年生の冬、阪神・淡路大震災は六千余人もの命を奪った。それは、私に「幸福とは何だろう。」という問いかけを与え、福祉の存在を提示してくれた。福祉とは、社会の成員が等しく得るべき幸福である。この時は、理想の幸福を与える仕事。それが福祉であり、人の役に立てる仕事と信じていた。

震災から四年目の一月、仮設訪問支援活動を、週末ボランティアの記事に目が止まった。行動こそが知ることに第一歩だと思ひ、参加することにした。

毎週末に自由参加で集まった人達で三人一組のグループを作り、半日をかけて「お話し相手」として活動するというのが、こ

のボランティアの仕組みであった。初めての訪問先では、一週間前に孤独死が出たところだった。そのためか、仮設自治会から「定期的に訪れてくる他のボランティア団体と住民がとでも上手く交流していて、みんな明るく良い状態なんです。それを第三者に乱されたくない。」と、ボランティア拒否を受けた。

こんな事態を想像すら出来なかつた私は、恥ずかしくなつた。ボランティアは、人を思いやる奉仕活動だから、受け入れてくれることは当然だ。そんな一方的な思い込みがあつたのだ。ここで私は痛切に思つた。ボランティアはする側とされる側、互いの思いはかりが合つてこそ成立するものだ。しかし、その仮設で活動できることとなつた。というのは、ボランティア側が仮設訪問することを、一週間前からピラで知らせていたからだった。こういつた一つ一つの思いはかりが、結実される瞬間を喜べることを嬉しく思つた。

グループ訪問へ出て、まず印象に残つたことは、玄関から見えるがらんとした空間、腐つて落ちそうな床。そして、そこで一人暮らしをするお年寄りの数の多さだった。知つていてももりだつた孤独死が、初めて現実として私に迫ってくる瞬間だった。

「虫がわかんうちに見つけてな。私ん時は、死体の臭いで見つけんといてな。」孤独死を発見したおばあちゃんが、力なく言つた言葉。震災はまだ終わらない。そう心に告げられた。人は決して一人では生きられない。私は一つの教訓を得た。私達は運が良かったわけではない。多くの犠牲者に、被災者に生かされているのだということ。そして、震災を忘れてはならないと。

そんな時、教え子が震災に遭つた、ある高校の先生との出会いがあつた。その先生は、「復興の速さは死者を充分に悼み悲しむ時間を奪つた。」と語られた。震災は、現代に欠けている「悲しむ力」を復権させる一大機会だったが、心よりも物が先行した。も

ちろん今もなお死者を悲しんでいる人はたくさんいる。だが、悲しみを押し殺して生きていく人が何んと多いことだと、訪問活動を通してうなずく他なかった。先生は、「だからこそ、彼をいつまでも大いに悲しみ続けたい。それが忘れないことになること信じるからです。」と語ってくれた。

こうして私は、一つ一つの話の中で多くのことを学んだ。私は第三者として話を聞いてはいたが、相手の言葉の奥にいる魂は、みんなにも宿っているもので決して他人事ではなかった。

「人は、人に認められるために闘うんだ。」そう心に焼きつけられる人に出会った。今年71才になるおばあちゃんが、町へ働きに出ているというのだ。「着ているものから、家、すべて他人の世話になりっきりの甘ったれた生活。仮設の人間が皆、そういう見方をされるのが嫌だから。」はつきりと語ってくれた。このパワーの源に、生への意地と尊厳を実感した。

ボランティアを始めて、ずっと心に焼きついているものがある。仮設の方の笑顔だ。私はここまで、あの笑顔に支えられてきた。「笑うから楽しくなるんだよ。」と笑顔が語っていた。笑うことによって、自分と他人が幸せになれる。お互いゆとりある状態でコミュニケーションがとれる、最高の働きかけだ。

私は、震災ボランティアで得た、これら

のことを活せる仕事に就きたいと思った。

〈2〉臨床心理士に魅せられて

そんな折、以前から精神状態が不安定だった妹が、学校を無断欠席し、行方不明になる事件が起こった。家に自分の居場所を感じていなかった妹は、行き場を求めていたという。

妹は、清水ヶ丘学園という場所にいた。そこは、学校不登校児が、施設生活の中で心を癒すことを目標とした施設だった。私と母は、学園から連絡を受け、すぐに駆けつけた。

そして、妹と話しをしたという臨床心理士の人と話しをした。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」と、口を開くごとにそう言っていました。あの子は、自分の存在を認めてほしいと、心で叫んでいるんですよ。」と静かに語ってくれた。私は、昨晩の自分の言葉と傷ついた妹の表情を思い返し、悔いても悔いきれなくなつた。妹は、命綱にすぎないできつとここへ来たのだろう。そんな妹を見事に救い出してくれた。

今までに、自分自身がスクールカウンセラーを受けてみたことがあった。しかし、あの臨床心理士の人のように、相手を理解し、その上で相手の意志を尊重できる人に魅せられた、この体験は初めてだった。そう思った瞬間、「私はこの仕事をした、も

う臨床心理士しかないんだ。」と思った。

私のモットーは、「端楽」ことだ。相手も自分も楽になれるように、働きかけることだ。ボランティアで得た「笑顔」という働きかけ、そして生き死に寄り添うこと。それらを最大限活せる仕事。それが臨床心理士。

私は四月から専門学校の心理学コースに進学する。震災ボランティアの体験を深めて、心を豊かに、強くもてるような体験と出会いを求めて出発したい。そう思い、決意した進学。そして、今やつと福祉の中から具体的な夢を見つけることができたのだ。

専門学校では、人の意志を尊重しえるゆとりをもてる視野を学習し、生きることの素晴らしさ、「死」ということを教えてくれた震災を、一人でも多くの人達に伝えていきたい。

それが「出会い」をくれた人達と共有した私の夢だから。